



20th
Sophia Drama Festival
1979

Oct.12~Nov.3

Sophia Little Theater

Sponsored by Sophia Drama Festival

Executive Committee

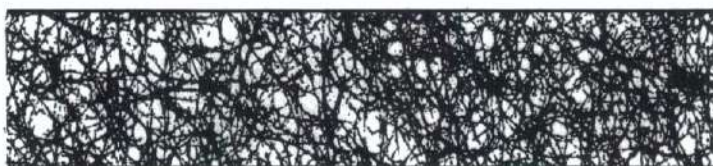
ロシア語劇
A・チェーホフ作

かもめ

10月12日(金)・13日(土)
ロシア語劇サークル上演

あらすじ

若い裕福な地主の娘、ニーナ・ザレーチヤは女優を夢みる可憐な乙女。作家志望の青年トレープレフとは深い仲。ある日、木立ちの合間から湖が開けるソーリン家の中庭を舞台に、彼の創った奇妙な劇が上演された。主演はニーナだ。数十年後の世界に思いを馳せて現世の無常をうたったその劇に、彼の母、女優のアルカージナ、その情夫、流行作家トリゴリーニは賞賛の言葉すら贈らない。結局、芸術における新形式をもたらそうと試みたその劇も途中で幕を降ろす事になった。しかし、その陰でただ一人彼の抽象観念の世界を理解し、彼の天分を認めている医師ドールンとトレープレフへの愛の片想いの辛辣さに耐えている不幸な娘マーシャの姿があった。一方、ニーナは、あの劇の上演された日、



★キャスト

アルカージナ 女優	増岡めぐみ(2)
トレープレフ その息子、青年	梶田 豊(2)
ソーリン アルカージナの兄	島村 裕彦(3)
ニーナ 若い処女、裕福な地主の娘	大田 公子(2)
シャムラーエフ ソーリン家の支配人	篠塚 芳男(2)
ポリーナ その妻	富樫 敦子(1)
マーシャ その娘	仁科 寿子(2)
トリゴリーニ 流行作家	猪塚 元(2)
ドールン 医者	渡部 昌善(3)
メドヴェージェンコ 教師	小松 久(2)
ヤーコフ 下男	阿部 和也(3)
料理人	山本みどり(1)
小間使	塚田 綾子(1)



★スタッフ

演出	阿部和也(3)
舞台監督	永田 靖(3)
照明	永田 靖(3)
音效	服部 悟(3)
装置	服部 悟(3)猪塚 元(2)
衣裳	大田公子(2)
メイク	日野由貴(3)
道具	山本みどり(1)塚田綾子(1)
美術	田口一哉(2)
制作	阿部和也(3)

初めて出会ったトリゴリーニに魅かれる。作家として円熟の境地に立ち自分の芸術の世界を持つているあの流行作家に……。虚名に憧れ、栄光を夢み、トリゴリーニの愛を信じ、女優へ、モスクワへ、トリゴリーニのもとへ去ったニーナ。それは、まるで湖が好きで自由で幸福なのにふとやってきた男の所在なさから破滅させられた「かもめ」のようだった。その頃、ただひたすらトレープレフの愛を待っていたマーシャも善良な教師メドヴェージェンコの所へ嫁に行く事で過去を忘れようとしていた。

そして二年後

大女優になる夢も、トリゴリーニとの愛もモスクワでの生活もすべて失い、今は一介の田舎回りの役者にすぎないニーナが、二年ぶりに訪れた湖の町ソーリン家。そこで彼女が見たものは、自分の才能の中でもがき苦しんでいるトレ

トレープレフの姿であった。着飾った娘を見るとニーナと見間違え、楽しかった昔の想い出の中に浸り続けていたこの二年間。二年ぶりの再会でトレープレフは再びニーナへの愛の炎の燃えあがるのを感じる。しかし、目の前にいるのは昔のニーナではなかった。おのれの十字架を負うすべを知りただ信ぜよ」と自分の生きる道、自分の信念を見つけたニーナ。相変わらず妄想と幻影の混沌の中をふらついているトレープレフ。この対照的な二人に遂に破局が訪れた。

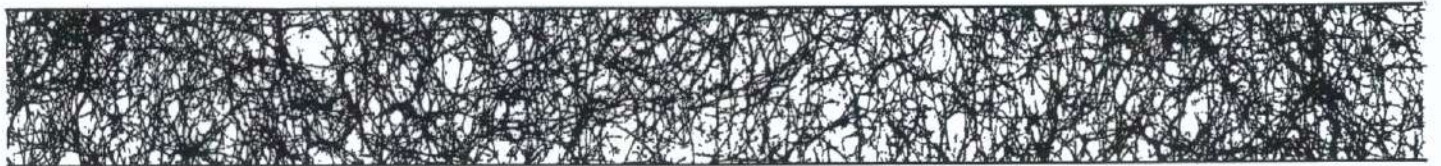
その頃、ここソーリン家では、秋の夜なが好例になっているロトーに今日は、トリゴリーンの姿も交え賑やかな笑い声が聞こえる。その騒ぎを掻き消すかの様に鳴り響く一発の銃声。驚くアルカージナ、すべてを知っていたかの様に泣き崩れるマーシャ。

才能がありながらも、その才能を発揮できず、自分の創った劇と同じように自らの人生にも途中で幕をおろしたトレープレフの短い生涯がここに終わった。

(文責 阿部和也)

演出雑感

「かもめ」を喜劇としてではなく悲劇として演出してみたい」とは若くして死んだ天才的演出家ヴァフタンゴフの言葉であるが、私も「かもめ」を悲劇として演出してみたいと思っている演出家の端くれである。ところがチェーホフは「かもめ」を四幕の喜劇と名付けている。私が「かもめ」の演出をすると聞いて幾人かの人が異口同音に、「どこが「かもめ」で喜劇なのですか？」と尋ねる。その度毎に「そのわからない所がコメディなんです」と冗談で逃げる辺り



は、まだ演出家としての自覚不足であろうか？ 冗談ばかりも言っていられまい。チェーホフの喜劇というものを私なりには捉えているつもりである。例えば、恋愛関係において絶望的な片恋の連鎖しかない複雑な人間関係、時の経過とともに変貌する人間と変貌し得ない性格的な面との対比、常に日常の意識の中で生活している者と、夢、もしくは理想を耐えず追いかけている者との対比が、チグハグな人生観やチグハグな人間模様を生み出し、その「取り違い」又は「認識の相違」が軽妙なアイロニーとなって表われている。もう一つ「かもめ」は、よくチェーホフの最も私的な戯曲と言われる様にトレープレフの文学に対する考え方が青年作家トレープレフを借りて至る所に出ている。ここでは文学における新型式の必要というものを説いているにもかかわらず、トリゴリーンに見られる長いモノログなどの旧套を脱せないチェーホフのチグハグさも「かもめ」作品全体から見た一つのコメディイになっている。

しかしこのような「取り違い」「相違」はコメディイの要素となると同時に、悲劇となる要素も多分に含んでいるのである。喜劇と悲劇、その紙一重と言っている中に生き続けるチェーホフの世界を、初めて演出する素人の私が扱み尽くし得るか否かは甚だ疑問である。しかし私は、この「かもめ」を、今述べた様な喜劇的な観点からではなく、夢を抱いていた者が初めて現実、又は社会に直面する時の坐折感、人間関係の認識の相違からくる不信感、恋と文学以外に人生の生きがいを見つけれなかった若者の悲劇などから、生の果敢無さ、愛の無常さなどを、この「かもめ」で描けたらと思っている。

(文責 阿部和也)

ドイツ語劇 10/19(金)~21(日)

シュテラ

W.v.ゲーテ作

Gruppe'79上演

(キャスト)

シュテラ	古沢昌子 (独2)
チェチーリエ (初めはゾマー夫人)	室田恵利加 (独2)
フェルナンド	小川暁夫 (独2)
ルーチェ	高村敦子 (独2)
執事	内田利昭 (独3)
駅馬車宿おかみ	中川ルミ (独1)
アンヒェン	小林菜穂子 (独2)
カルル	宮城伸夫 (独2)
駅馬車の馭者	門上満夫 (独3)
シュテラ侍女	浜田尚子 (独1)
従僕達	宮城伸夫 山地繁(独2)

(スタッフ)

演出	倉林正文 (独2)
舞台監督	中田義一 (独文3)
照明	大谷亮 梅本逸郎 (独2)
効果	米山ゆかり 饗庭朋子(独2)
衣装	菊池由美子 (独2)
メイク	菊池由美子 (独2)
小道具	宮田礼子 (独2)
舞台装置	池田圭二 諸井克彦(独2)他
協力	曾根伸一
制作	小高慶子 (独文3)
	遊佐悦子 (独2)
	浜田尚子 (独1)

多弁の時期

初稿「シュテラ」を摺筆したゲーテは二十七才であった。ゲッツ、ヴェルターという青春文学の双璧を公にした後の戯曲である。にも拘らず、この「シュテラ」は、日本のゲーテ愛読者の間ではことのほか不評を浴びている。

一つの戯曲として見るならば、告白形式が一貫されている点に問題があるだろう。対話形式であるなら、台詞が動作を、動作が台詞を呼ぶ活気で観客を包むことができる。しかし、「シュテラ」において、そうした外面からの援助は期待できない。

では、何故、敢えてこの戯曲を選んだのだろうか？ 此処には、完成された小説家ゲーテではなく、人間としての若きゲーテが居るからである。未完成の一個の人間ゲーテが居るからである。劇中のフェルナンドは、フリーデリケとリリーという二人の女性の間でふっ切れぬ恋心を彷徨わせていたゲーテその人に他ならない。

誰でも多少なりとも恋の経験のある人なら、「恋の悩み」で親友を煩らわせたことを思い出さないだろうか？ 又、うんざりとしながらも好奇心から、A君とB子のラブストーリーの聞き役を演じたこ

とはないだろうか？ 口元から今にもはみ出そうな苦笑を殺しながら。恋する人は上下別なく詩人になるといふ。一人、部屋に居る時は、思い悩んで感情過多の詩でも連ね、人前では俯いて過ごし、いざ親しい友人と二人になれば、「あの人にとって私は何なのだろうか？」云々、珍腐な問い掛けを続けてしまう。

是非は別として、こういう生の行程を私たちは辿らざるを得ない。思い起こせば、恥ずかしいやら、懐かしいやらで居たたまれなくなるものだが、青春時代の一つの重要な「点」であればこそ、許されるべきものではないだろうか？

ゲーテも私たちと同様の行程を踏んだのである。いわば、多弁の恋を過ごしたのである。そして、彼の聞き役は、「シュテラ」を観る観客なのである。劇も文学のジャンルであれば、余り自らの感情に従ってばかりでは、やはり昇華された作品とは言えない。だが「シュテラ」のゲーテは多弁である。思うこと、言いたいことを、とにかく誰にでも言わせてしまう。チェチーリエは冷静な女性、シュテラは情熱の女性で、フェルナンドはさて、増々男の弱点の権化となつてしまった所以であろう。

劇として完成された作品ではないとしても、ゲーテならぬゲーテ

Stella

の存在を、私たちに近いゲートを知らることができるのは面白いと思う。小ぢんまりと形式的に出来上がった若人が多い最近、登場人物の内面吐露は如何にも清々しい。

一人の男と二人の女。いわゆる三角関係がこの劇の主旋律である。二重結婚をした男の惨めな結末と、一人の女性の憐れな死。これらを聞けば、人はすぐさま、一連のメロドラマを思い描くかも知れない。が「シユテラ」は全くその逆理を描く。一人の男、フェルナンドは二女性間を巧みに縫う伊達男ではない。心底一人を愛している。偶然、彼は長い放浪の後、再び戻った我家で二人の女性、妻とどういふ訳か前の妻を目のあたりにすることになってしまう。驚き、悩み、嘆き、そして死ぬ。その姿には正に見栄も外聞もない。惨めなものである。又、二女性、シユテラとチェチーリエは意に反して憎み合わない。一人の未亡人とその下に娘を奉公に出す母親としての二人の出会い。全く何も知らぬままの出会いが友情を芽生えさせてしまう。二人共に、実は夫が消えてしまつて所在がわからなくなつたままであるという、同じ境遇が、娘ルーチェを媒介として友情を相互に植え付けた後の出来事なのである。チェチーリエはルーチェを連れて立ち去ろうとし、シユテラも身を引こうとする。こうして劇は緊張してゆくのである。

女性にしてみれば、フェルナンドは弱い、魅力に欠けた男であるに違いない。だが外面に示さずとも、人間である限り、その内面に、頼りなく揺れ動く影があるはずであろう。従つてこの劇の着目点は、当然、独白場面である。私たちが日常、心の内で想いながらも口に出すのを憚る事を、シユテラ、フェルナンドは舞台上で独白吐露する。形式ではなく内容に、動作ではなく人物の心の葛藤に目を向けるべき劇なのである。

「シユテラ」のもう一つの劇的要因は、シユテラとチェチーリエの共鳴和音である。二人は同一の男と時間的に差のある過去を背に持っている。チェチーリエには既に大きくなつた娘があり、フェルナンドとの過去は、娘の意識にすらない。一方シユテラは子供を小さくして失い、その墓はまだ生々しい。チェチーリエが、去ろうと一早く決意できたのは、年長者の冷静さ故であろう。自分には娘ルーチェが残されていることを省み断念することができたのである。成長した娘ルーチェは、彼女の過去が既に遠いことを示している。一方、シユテラは、新しい友人をも、戻つてきた夫をも手放すことが

できない。相反する二方向に自らの情愛を向け、その為とどうと律する術をなくし毒杯を仰ぐのである。「シユテラ」の悲劇たる所以は、フェルナンドにはなく、二人の女性間の友情にある。

心の劇。もし、そうしたものがあるとすれば、「シユテラ」こそ該当作品であろう。人間の内面は外部から悲しい程に揺すられる。ましてや青年期の私たちの心は。希望、挫折、憔悴、失意。そして又、希望……。数々の経験を布石にして、私たちは私たちの螺旋階段を上つてゆく。遅々として進まぬ生の行程だが、ふと気付いて振り返ると、其処には、一度と繰り返せない無数の日々があるのである。ゲートは、「シユテラ」に彼自身の心の日々を託したのではないだろうか。

飢餓感を失いつつある私たち、「やさしさの世代」。語劇二十年祭で、独語グループは古典の中に、忘れかけている大切な「何か」を捜し求めようと思うのである。観客の方々と共に。

あらすじ

或る駅馬車宿に母娘が辿り着く。近くに住む未亡人シユテラの下へ、娘ルーチェを奉公に出す為である。ルーチェが母を寝かせて、食事をとる時、彼女は一人の男と相席する。男とはフェルナンド、彼女の父の父親その人なのであった。だがルーチェは何も知らない。シユテラはルーチェを気に入り、母親のチェチーリエとも意気投合する。彼女等は、夫に去られたという共通の悲しみを過去に持つ。いたわり合う中、チェチーリエはシユテラの夫、男爵の肖像画を見せられて愕然とする。何と、彼女自身の夫でもあったのである。一方、フェルナンドは前の妻と娘の行方を捜し求めてもかなわず、失意のまま、シユテラの所に気分を新たに帰る。だが、その場で彼を待ち受けていたのは、彼の二人の妻であった。

チェチーリエもシユテラも、芽生えた友情故に、自らが立ち去ろうと試みる。だが、自分の坐している状況をはっきりとは把握できずに居るのだった。決断力もなく、オロオロするフェルナンドが、二人を更に混乱させる。

シユテラが毒杯を仰ぐ。時を同じくして、銃声が一つ響く。彼女を介抱するチェチーリエの所にルーチェが飛んで来る。「お父様が!!」と叫びながら……。

フランス語劇 第20回公演

“Le bal des voleurs”

(泥棒たちの舞踏会)

Jean Anouilh 作

キャスト

LADY HURE	藤井美穂
LORD EDGARD	大柳貴
PETERBONO	佐藤光男
GUSTAVE	蛭川剛二
HECTOR	石田晃
JULIETTE	山形恵美
ÉVA	飯田房代
DUPONT-DUFORT PÈRE	鈴木規夫
DUPONT-DUFORT FILS	栗原治夫
LE CRIEUR PUBLIC	佐藤秀樹
LES AGENTS DE POLICE	後藤伸幸
	小林靖
LA PETITE FILLE	浅田美左代
LA NOURRICE	片山はるひ
LE MUSICIEN	飯田雅章

スタッフ

演出	鈴木規夫
舞台監督	蛭川剛二
照明	小林由子 米山祐之
音效	荒木陽太郎
衣装	沼田万里
道具	岡本真澄 清水芳郎 吉野彰治
小道具	清岡智比古
メイク	宇田博子
美術	文蔵晴子 細江万太郎
制作	大柳貴 藤井美穂
会計	野田麻里子
発音指導	モコール神父

泥棒たちの舞踏会 あらすじ

英国の富豪貴族レディ・ハーフは、ひと儲けしようとスペインの亡命貴族に化けた三人の泥棒の素性を見抜きながら、憂さ晴らしに自分の別荘に招きます。夫人の二人の姪のうち若いジュリエットは、一番年少の泥棒ギユスターヴと恋に陥り、それは次第に真剣なものへと変わってゆき、ギユスターヴは偽りに耐えられなくなってしまう。仲間たちが安逸を貪って仕事にかからず、別荘の面々が舞踏会へ行った間に、彼は一仕事して逃げようとサロンで故意に安物ばかり漁っていると、既に彼の素性を知ったジュリエットがやって来て、駆け落ちを迫ります。一旦それを承知したギユスターヴは、車の中で眠り込んだジュリエットを、そっと連れ戻して置いて行こうとしますが、目をさましたジュリエットは彼に必死です。このひたむき

な「愛」に感動した伯父ロード・エドガーは、ギユスターヴを幼ない時誘拐された自分の息子だと云って、その素性をかばおうとしますが、彼はこの親切な嘘を拒みます。彼を何とか説き伏せようと庭へ連れ出して行くジュリエットの姿を、見送るレディ・ハーフと年上のエウアは、己れの過ぎ去った青春に、吐息するのであります。

素描 I

アメイは、自ら語っているように、生活を立てようとして、映画の仕事に少しやり、二つの通俗的なドラマや、二・三のメロドラマを書いたにすぎなかったにせよ、そうした映像関係の仕事をしうる能力について、私たちは、並々ならぬものを、彼にみておく必要があるようです。演劇芸術と映像芸術のあいだには、本質的差違が無論横たわっているにしても、ひと



つ天才から生まれる「像」は、二つの差違を埋めてしまふ大きな要素となつてゆくのです。殊にアヌイの場合、二十二歳という若さで仕上げたこの「泥棒たちの舞踏会」についてみると、そうした混沌とした状態を垣間見ることが出来るのです。もしこの作品が一九三二年でなく一九五二年に創り出されようとしたのであれば、間違いなく映画用シナリオに何がしかの形で姿を変えていたでしょう。逆に視点を持つてみれば、この作品は、それを許す軽妙さを持つているということです。

素描Ⅱ

レーモン・ラディゲが「ドルジェ伯の舞踏会」でこんなことを言っています。「悲劇というものは、思いがけないほど下らない物のまわりに好んで起つたりしたがるものである。さてその場合、何とその悲劇が、一個の帽子でしかないものに、力強い意味を好んで与えることか！この「泥棒たちの舞踏会」においても、その「一個の帽子」に気付いてしまつた人々が、織りなす「喜劇」という色彩を多分にもつているように思われます。むろん、ゴルギアスの言うように、あるものをその同一のものとして何か他のものから表白することは正しくないのですけれど、アヌイの、どうしようもなく引きづられていく「気晴らし」の喜劇を、作者の狙いどおりに、ベルグソンの言う笑いに伴う無感動でなくして、にがみの残る、けれども不快ではない笑いにもつていくために、私たちは努力しなければならぬ立場にある様です。

素描Ⅲ

劇の構成上から、この作品は、決して完璧とは言えません。いつでも単純な疑問——なぜ？——が軽く頭をかすめていきます。なぜ、ギユス

ターウとジュリエットが恋に陥らなければならなかつたのか？なぜロード・エドワードはレディ・ハーフと結ばれずに今までいたのか？ etc. 巧みな対話や人物の出し入れにばら色の詩情が流れ、その詩情がアヌイ喜劇を通俗化に墮させない重要な支柱」という論者は多々ありますが、私たちは、おそらくこの「泥棒たちの舞踏会」をわけのわからぬ「崇高さ」で塗り固めなければならぬ必要性を意識しはしないでしよう。

(演出 鈴木規夫)

Jean Anouilh について

Anouilh は、「自己」を語ることの少しい作家として有名である。一九一〇年、ボルドーに生まれ、一九三〇年、処女作「マンダリーヌ」(一九三二年初演)でデビューした。様々な人々の語る彼についての推測を総合してゆけばおそらく私たちは、そこに、ひとつの屈折した青春と、燃えきらずにいた情熱の鋭利な観察を内奥にみつけることになる。

今回上演の *Le bal des voleurs* は、彼の二十二歳の折の作品で、彼の早熟な天才が、初めて認められたものと言って良い作品である。ここに描かれる青春も、その奥に、崩れかけてゆく積木の箱のような、平面的ではあるけれど緊張を必要としている、といったひとつのくつきりとしたデッサンである。見方によっては陳腐なメロドラマ的喜劇におさまってしまうこともあろうけれど、彼は、たとえそのように批評されても、一言として自らの主張を、セリフ以外に語らせることはないであろう。彼によって織り込め、紡ぎ出されたテキストは、そういう意味においても、常に自由でありうるものとなっている。そして、彼が要求する唯一の内容は、自らそうした生き様の人であった、苦渋に満ちた「純粹の探究」に他ならないのかもしれない。

Le bal des voleurs

el circulito de tiza

スペイン語劇 11/1(木)~3(土) 2時開場
3時開演

白墨の輪

アルフォンソ・サストレ作

スペイン演劇研究会上演

☆キャスト

第一部 Parte Primera "El Circulito Chino"

先生 El Maestro	柿沼秀雄
アイ夫人 Señora Ay	岩川佳代
マ夫人 Señora Ma	吉田利江子
パオ裁判官 Juez Pao	高橋直行
書記官 El Secretario	其輪真次
産婆 La Comadre	長坂美英
床屋 El Peluquero	中村哲雄

第二部 Parte Segunda

"Pleito de la Muñeca Abandonada"

風船売り La Vendedora de globos	白倉克典
ロリータ Lolita	飯塚久美子
料理人パカ La Cocinerita Paca	木村裕美
靴の修理屋 El Zapatero Remendón	瀬川一路
くず屋 El Trapero	高橋直行
屋敷の門番 El Portero del palacio	中村哲雄
町の子供たち Los Niños del barrio	梶 雅行 青山のり子

☆スタッフ

演出	飯塚久美子
監督	柿沼秀雄
台本	柿沼秀雄 其輪真次 瀬川一路
照明	宮地卓哉 中村哲雄
音道	白倉克典 梶 雅行
大小	木村裕美 吉田利江子
衣装	石井和江 長坂美英
メイク	石井和江 青山のり子
挿入歌	飯塚久美子
作曲	石川ひろ美
マネージャー	清水憲男先生 倉林瑠璃子
協力	ハイメ・フェルナンデス先生
顧問	

『白墨の輪』あらすじ

ジリジリジリ。始業のベルが鳴って数学の授業が始まります。先生は、黒板に円を描いて円の説明をしていると、あることを思い出しました。今日は、この時間に劇をする約束をしていたのです。「せっかく黒板に円を描いたのだから、この円を使った劇をやろう。」こう言って劇の話をして先生は奥へ下がり、いよいよ劇が始まります。

第一幕

中国のピンバン州バン地方コンコン市チンチン村の裁判所では、今日も裁判が行なわれています。女中をしていたアイがマ夫人の夫を毒殺し、おまけに子供を奪ったという罪で訴えられたのです。ところが、アイは、それはマ夫人のウソで、マ夫人が財産欲しさに自分の夫を殺し、子供がいなくて相續できないので、アイの子供を自分のものにしたと言っているではありませんか。そこで、困ったパオ裁判官は、有名な「白墨の輪」のテストをやることにします。そして……。

第二幕

舞台はガラッと変わって、スペインの下町。風船売りのおばあさんが登場し、「白墨の輪」の話を始めます。大きな屋敷の娘、ロリータが捨てた人形を、その料理人の娘、パカが拾いました。パカは仲良しの靴屋に修理してもらい、大事にしていますが、そこへ本物の持ち主であるロリータが母親に叱られたので人形を捜しに来て、二人で取り合いになります。けんかを聞きつけてやってきたくず屋のフリアンによって裁判が始まりますが、果たして、人形はどちらのものになるでしょうか……。

アルフォンソ・サストレとその作品

一九二六年二月二十日、マドリッドに生まれる。彼の少年時代は、スペイン内戦の真最中であつた。従つて、その爆音と恐怖、そして空腹の日々は、後の彼の作品に大きな影響を与えた。戦争直前に中学に入学したが、政局の命令によって、学校の授業が中止になつたので、ある私立学校で勉強することになった。ここで彼は、後にともに劇作家としての道を歩むことになる、アルフォンソ・パソらと知り合う。一九四三

年、学校を卒業すると、家族の勧めで、パソと共に技術工学の勉強を始めたり、税関吏士になろうとしたが、いずれも途中で断念、結局、大学に進学し、そこで、パソ、ホセ・マリア・デ・キント、ミゲル・ナロスらと劇団“Arte Nuevo”をつくる。これは二年ほど続いたが、経済的な理由で解散する。一九四六年、マドリッド大学に入学したが、演劇に没頭するがたわら、アルバイトに精を出した。一九四八年、学生雑誌に劇作品の批評・解説を載せるようになったが、この頃から、演劇による社会批判、告発の可能性を意識するようになり、ホセ・マリア・デ・キントと共に、“Teatro de Aptación Social”を結成する。彼の初期の傑作とされる“Escuadra hacia la muerte”が、一九五三年、マドリッドで上演され、異色の若手劇作家として注目され始める。翌年上演された、“La Mordaza”により、プロの劇作家としてスペイン演劇界に確実な一歩を踏み出した。一九五五年、ヘンペーバ・フォレストと結婚、同年学生運動に加わった為、逮捕される。後にパリへ行き、初めての劇評論文“Drama y sociedad”を出版する。一九五九年頃から、ドイツの劇作家ベルトルド・ブレヒトについての研究を始める。同年、“En la red”を書く。またこの頃、アエロ・バジェホとの「可能性」についての論争が始まる。一九六〇年、“Grupo de Teatro Realista”を結成する。“En la red”以降、それほど重要な作品の上演はなかったが、七十年代に入っても、彼の精力的な活動は続いている。

彼はこれまでに、二十四の劇作品と、二つの児童劇を書いているが、その二つのうちの二つが、“El círculo de tiza”である。彼の作品を包括して言えば、研究 (interrogación) と暴露 (revelación) と言うことになる。そこには、人間の経験と、詩的繊細さが豊かに盛り込まれているが、それは、人間の尊厳に基いたものであり、さらに、人間自身への探求、ひいてはその社会のすみずみまでの暴露へと到るのである。彼は、「知的、芸術的仕事の意味は、世の中の全てを鮮明に映し出すことにある。」と言っている。この演劇の社会改革的役割についての意識は、“Teatro de Aptación Social”結成から、プロの劇作家として第一歩を踏み出した一九六〇年頃までが特に強かった。後には、こうした現実主義にプレヒ

トの影響と思われる、巧みな話術、挿話的構成、現実とフィクションの混合といった要素が取り入れられ、それに奇抜な音響効果を用いて、彼の作品の根幹となった。代表作としては、先に述べた“Escuadra hacia la muerte”、“La Mordaza”、“En la red”その他“Ana Kleiber”、“El cubo de la basura”、“El pan de todos”、“Tierra roja”などがあつた。

(柿沼)

演出雑感

演出なんて、全く初めての体験である私にとって、昨年十一月の執行部交代の時、この役に就任してからのというもの、それこそ、なにかもが『未知との遭遇』でした。それまでは、「何故、こんな事をするのだろう。」と、意味も解せぬままやってきた体操やエチュードなどでしたが、演出という立場となつて、いろいろと勉強し、あれこれと考えていくうちに、以前の自分を恥ずかしく思うようになってきました。演劇の練習というものは、どんな小さなこと一つをとつても、演劇にプラスになる事であり、私たちは、常に真摯な態度で真剣に取り組んでいかなければならないということがわかったのです。

私は、こと演劇というものは、人に教えてもらうのではなく、自分で、体験して、実感していくものであると思つています。「この練習は、こういう効果があるから、一生懸命やりましょう。」と言われても、そうは簡単に納得できないのです。やはり、自分の心と身体で、実感して初めて納得できるのです。ですから、演出となつて、演劇に対してあれこれと考へたこと、新しい目が開けたことだけでも、私は幸福者だと思ひます。そして、一人でも多くの人たちに、私が感じていような演劇の楽しさ、演劇への愛着を実感してもらいたいと思ひながら、劇作りを手がけていきたいと思つている今日この頃です。

何分にも未熟な私ゆえ、これまでも、OBや先輩方から、励ましや、助言をしていただき、本当にありがとうございます。

(K. Iizuka)

祝 語 劇 祭

130カ国・215都市にサービスネットワークをもつ

AIUの海外留学生保険



AIU 保険会社 池袋支店

豊島区東池袋1-25-6(信友池袋ビル7階)

TEL 03 (981) 4 1 7 1 〒170

詳しいご相談は——那 須 眞 次へ

Pizza inn 赤坂店

ディナータイム 5:00PM~11:00PM

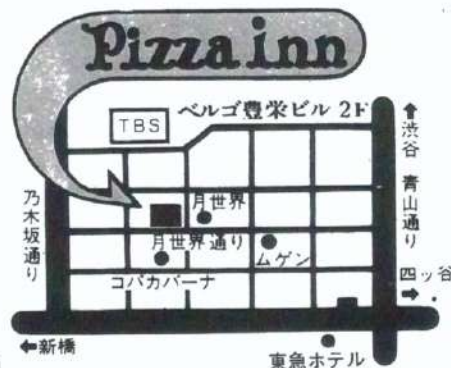
生ビール・コーラ・ワイン・コーヒー

飲み放題でピザ・サラダ 食べ放題!

男性.....¥1300

女性.....¥900

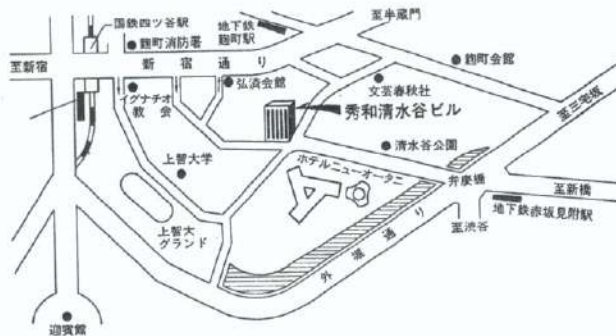
港区赤坂3-11 電話(586)7490



無煙ロースター使用のお店

焼肉 紀尾井

〒102 東京都千代田区麹町5の7
秀和清水谷ビル3階
電話 03 (263) 1870



●日曜・祭日はお休みさせていただきます。

発行 上智大学語劇祭実行委員会

編集責任 永田 靖

構成 曾根伸一
レイアウト

発行日 昭和54年10月1日

印刷 三鈴印刷株式会社

新宿住友ビル49階

あしべパーク

Cocktail Lounge

地上 200m の夜景を見ながら、大学生同志の安価な、
コンパ・パーティを、お楽しみ下さい。

Student Associated ACB PARK in Universities

—Free—

このパンフレットを、お持ち下さい。特別に御一緒の方も、
ボトルを無料贈呈致します。

We are waiting for you would be coming.

PM 5:00—11:00

TEL 344—6888

¥400

